

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

ローマで双子育児⑬

浅田 朋子

双子は4歳半の今まで、たくさんの時間をイタリア人の祖父母と過ごしてきた。

現在は幼稚園に通い始め、しっかり歩き大抵の事はできるようになったので、手助けに来てもらうことも少なくなった。

イタリアで出産すると決めたと伝え、私の母は「私が出産に立ち会っても言葉も通じないし、かえてみんなの負担になるから」と気づかって、出産の1ヶ月後にローマに来ることになった。結果、妊娠中から義父母に全面的に頼ることになった。出産1ヶ月前には大きなお腹で身動きが取れなくなったので、義父母宅に居候した。

そして生まれてから2週間は義母が家に泊まりに来てくれ、1日7回の授乳を手伝ってくれた。母乳だけでは足りず粉ミルクと半々にしていたので、先に一人に母乳をあげ、2人目に母乳をあげている間に義母が一人目に粉ミルクをあげるという段取りでやっていた。それが終わるとゲップをさせ、哺乳瓶を洗い、消毒・・・これが1日7セットなのでもう一日中授乳している状態だった。流れ作業をスムーズに進めるため、きっちり分担し、無言でこなし。

私が39歳で出産したとき、義母は66歳だった。「もうちょっと若かったらねえ・・・もっと色々できるんだけど・・・」と悲しそうに何度も言っていた。私が育児に関して、これはイタリアではどうしているの？と質問しても、「うーん、あまりにも前すぎて覚えてないわ・・・」となるのである。義母が夫を出産したのは40年前・・・そら覚えてないわ。必死で思い

出しても、情報が古すぎて役に立たないことが多かった。でも義母がそばにいてくれるだけで私はとても安心できたし、二人で知恵を出し合い乗り越えた。



【市場の魚売り場でお買い物の中の義父】

もともと義父母は、私たちの結婚当初から実の娘のように私に接してくれたのだが、双子の誕生で関係はさらに密になった。

義父はタクシー運転手状態で、私を病院や手

続きに連れて行ってくれた。さらにオムツやミルクの調達もやってくれた。「さっきミルクをいつもの店に買いに行ったら、どんだけミルク飲ませてんの？って聞かれたよ…」と義父があまりにもミルクを頻繁に大量に買うので、レジの人が聞いてきたらしい。「双子なんです…」という、「あー、頑張ってる！」と励まされ、ミルクの試供品をくれたそうだ。「もう、この粉ミルク会社から感謝状もらってもいいくらい買ってるな」と義父は苦笑いしていた。

しかし上には上がいる。下の階に住むロシア・イタリア人ハーフの双子男児である。お母さんのロシア人レーナちゃんは羨ましいほど並々と母乳が出ていて、普通なら双子でも足りるほどであったが、さすがロシア戦士。それでは全く足りず泣き叫ぶので、さらに粉ミルクを足していた。最初は出が良かった母乳も急速に搾取され、早々に終了してしまったようで、「もうね、一滴も出ない。それに母乳とミルク半々2セットを1日7回なんて無理。」と完全粉ミルク制に切り替えた。それからは恐ろしい量の粉ミルクを黙々と旦那さんが運んでいた。

ロシア戦士の世話も当然一人では大変なので、レーナちゃんのお母さんは出産予定日の1ヶ月前からローマ入りし、2ヶ月ほど滞在して双子の世話をしていた。

ある日、久々に外に出てみるとアパートの入り口の外に双子男児のベビーカーがポツンと置かれていた。こんなところに置きっ放しにしているなんて変だなと思い、通りがけにちらっとベビーカーのひさしの中をのぞくと、「……ダァ…」とヨダレを流した双子が乗っていた。

「の、乗ってるやん！」周りには誰もいない。ほったらかしか…?! 周りを見渡しても中庭は無人だ。すると「チャオー！」と頭上から声が聞こえ上を向くと、2階のレーナちゃんの家のお母さんが手をふっていた。お母さんは果物を食べながらニコニコしていた。「…レーナは？」と聞くと、寝ているジェスチャーをした。お母さんはイタリア語がわからないので、私たちはジェスチャーや簡単なイタリア語で会話している。私は双子男児の乗るベビーカーを指差し、「なんで？」と聞くと、お母さんは「見てるのよ～、ここから」みたいなジェス

チャーをし、「Bene! Bene!」と大声で言う。

家に戻り、義母にこのことを言うと絶句していた。「外の空気を吸わせていたってこと？それを2階の窓から見ていたのね…」義父は「もうロシア式スパイ養成が始まってんだな～」と大笑いしていた。

2歳半でオムツが取れるくらいまでが本当に大変で、長引く夜泣きや、「これだったら粉ミルクの方が楽だったな…」と思えるほどの離乳食作りでフラフラだった。双子の世話以外、一切何もできなかった。



【義父が買ってきたのはアサリ】

外国で出産することに関しては、十分覚悟し準備もしていたのでスムーズだった。しかし「出産」をゴールのように思っていたので、出産後の「育児」に関しては「無事生まれればそれで大丈夫、どうにかなる」と楽観視していた。イタリアの「育児」に関する知識がほぼなかったのも、イタリア式の子育てや離乳食に戸惑い焦った。

最初は、わざわざ日本米を買っておかゆを作り、日本式の離乳食にしていた。でも外国で手に入る日本米は新鮮ではないし水も硬水なので、軟水をわざわざ買って煮ていたが、どうも美味しくなく柔らかくならない。イタリアでも初期の離乳食は米粉である。そこに新鮮なオリーブオイルをかける。のちには野菜スープを裏ごして、パルミジャーノをふりかける。さらに月齢が進むと、このスープに小さなパスタを入れる。

私は、イタリアの米粉があるのになぜか日本米からおかゆを作ることにこだわっていた。「日本式」をやるようにする私に義母は何も言わず従ってく

れ、義父はわざわざ遠くまで日本米を買いに行ってくれた。

私がやっと「郷に入れば郷に従え」を思い出し、イタリア式の離乳食に切り替えた時、「一生懸命手作りしていたら、それだけで十分よ」と、野菜スープの作り方を教えてくれた。

日本のことをそんなに良く知っているわけでもないし、ましてや日本に行ったこともない義父母。それでも私の考えや日本の習慣をとて尊重してくれる。優しく、なんでも受け入れてくれる。夫にももちろん愚痴や不安を話していたのだが、やはり日中一緒にいることの多い義父母に私の思いをぶつけてしまっていた。

ある日、夫と義父が双子を公園へ連れて行った後、義母と台所で話をしていた。何がきっかけだったのか、育児の疲れと今まで溜まっていたイタリアで生活することのストレスや不満が爆発し、「日本に帰りたい！お母さんに会いたい！！」と義母の前で大泣きしてしまった。夫の前では数え切れないくらい泣いていたが、今まで義父母の前で泣くことはなかった。

私は子供みたいにわあわあ泣いた。40歳の大人がこんなことを言って大泣きするなんて本当に恥ずかしいことだが、この時の私はもうどうにもまらないくらい涙が出て感情が抑えられなかった。義母はそんな私をじっと見つめ、子供にするように私の頭を優しくそっと撫でてくれた。

「日本に帰りたい」という言葉は一番彼らを傷つけ心配させるとわかっているので決していうことはないと思っていたし、自分でも本当に心から日本に帰りたいと強く思ったことはなかった。イタリアに住むことは自分が選んだことだし、イタリアにも日本にも良い悪いはある。どこにいても同じだと考えるようにしていた。

私は泣き止むと、「ごめんなさい、嫌なことを言ってしまって」とあやまった。義母は「いいのよ。夫に言えないことも、なんでも好きに私に言ったらいいの。私はあなたの話を聞くから。お母さんに会いたくなったらいつでも日本に帰れるし、一人にならなくなったら双子を私に預けにきなさい」と言ってくれた。

何か言おうと言葉を探していると、夫と義父、双子が帰ってきた。目の赤い私を見て、夫と義父が

心配そうに「どうしたの？」と聞いてきた。義母は「ローマ市役所の手続きが遅いから、この子が怒ってたのよ！またイタリアに腹を立ててるのよ～」という、「ああ、ここではいつものことだよ！しょうがないよ、この国はこうなんだから。また好きになるよ」と、義父が私の肩を抱いて笑った。

嫌いになったり、好きになったり・・・それをずっと繰り返し、なんやかんや言いながら今までイタリアに普通に住むことができてるのは、この義父母のおかげである。私を外国人だからと特別に扱うこともなく、日本の習慣や文化を尊重し、「素晴らしい国だ」と言ってくれる。国や言葉を越え、初めて夫以外の人と心から分かり合えたのが義父母である。

彼らが双子の祖父母であることが本当に誇らしく、そして恵まれたことだと思う。双子には、これからも多くの時間をこの祖父母と過ごして欲しいと願っている。



【義父お手製のヴァンゴレの Pasta。私が落ち込んでいると義父は得意の Pasta 料理を作ってくれる】

(当館元受講生)

イタリア食文化紀行

～ナポリ編～

岡本 勇志

ナポリの中央駅に降り立った。異様な雰囲気。今までいたトーディとは全く違う世界。

人がとにかく多い。まるで東南アジアの町のようにバイクや車が飛び交い露店が並び移民の人たちがたむろしていた。泊まるこだけは事前に予約し、あとはノープラン。とにかくうまいピザと海鮮料理を求めて、ナポリ独特の空気に少し恐れながら堂々と出発。

さあここから10日間のプチひとり旅の始まり。

これまで書いてきたように、私はウンブリアのトーディという町で一年間レストラン研修をした。そして研修を終え日本に帰国する前に念願のイタリアひとり旅をした。日数は短く、約10日間。ルートはトーディ→ローマ→ナポリ→ポンペイ→シエナ→ポローニャ→ヴェローナ→ヴェネツィアと、南から北へ上がるルート。手段はバスと電車で、ホテル以外はノープランで、とにかくその町の美味しいものを一年間で培った語学を武器に行き当たりばったりで探すというテーマだった。

そして、まずたどり着いたのがナポリ。

ナポリではもちろんピザ、そして海鮮料理が目当てだった。

ナポリは有名な観光地だが、とにかく治安が悪く、トーディを出発するときも働いていたレストランのシェフやホームステイの家族からかなり心配された。イタリア人が心配するほどナポリは治安が悪いのだ。実際ナポリに着いた時、雰囲気が異様だった。ある意味で活き活きとしているが、気を抜いたら何かをされるなと思わされるそんな雰囲気だった。だから私はあえて堂々とあたかもナポリに慣れていますよという感じで散策を開始した。

到着したのが昼前。まずはなにをさておきピザを求めピッツェリアを探した。さすがナポリだけあって調べると老舗のピッツェリアがいくつも出てきた。その中でも一番人気のところへ行ったが休みだった。仕方がないと、二番目のところへ。また休

み……。あれ？運が悪いのか、と諦めかけ、喉が渴いたのでビールでもと、近くのバルへ寄った。ここでビールを飲みながら店員さんに何気なくピッツェリアが2件とも閉まっていたと話すと、笑いながら『そらそうだよ、今はバカンス期だから、ほとんど個人の店は長期休みだよ』と話してくれた。そう、私が行ったのは8月半ば。完全にイタリアはバカンス期でみんなバカンスに出かけていた。それでも諦めきれないというので、『ラッキーだね。この近くで唯一やっている美味しいピッツェリアがあるよ』と紹介してくれた。これがひとり旅の醍醐味だ。ハプニングの中で出会いがあり、そして結果、思いもしないところへ行ける。



【ピッツェリアの窯】

こうして紹介されたピッツェリアに到着し、やっと本場のナポリピッツァを食べることができた。このお店も老舗らしく地元の人が多かった。食べたのはもちろんマルゲリータにビール。トマトソースの軽い酸味にモッツァレラのコク、それをバジルの香りが引き立てる。やはりイタリア人らしくピッツァにはビールをあわせる。味はいうまでもなく美味だった。

さて、念願のピッツァを食べ、ひとまずホテルに向かった。ホテルはネットで事前に予約していた。

食事なしの素泊まりだった。

ナポリの街を満喫しながらマップをたどりホテルの場所に到着。

ん？ここ？もう一度マップを見る。やはりここだ。ん？嘘やろ…。

マップが示した場所は落書きだらけのアパートだった。治安の悪いと評判のナポリ。宿は落書きだらけのアパート…。もう日本へは帰れないと思った。いきなりハズレくじを引いたような最悪の気分になった。そして数分アパートの前に立ち、腹を括った。『よし行こう、もしここで何かあってもそれはそれで旅の思い出』と無理やり自分を納得させ、ホテルの名前が書いてある2階へ上がってチャイムを押し名前を言うと、なんとも気さくな女性が出てきて、受付へ案内された。

そこでホッとした。部屋の中はとても綺麗で設備もしっかり整っていて、おまけにホテルの大家さんは日本が好きだとか。話を聞くと、アパートの2階をB&Bにするために改装したが、アパートの門はオーナーが違うのでできずに元のままなのだとか。とにかく生き返った気がした。



【落書きだらけのアパートの門】

大きな安堵感に包まれ、夜のレストラン探しまで部屋で休憩することにした。

さて、一息ついたところで再びナポリの街へ繰り出した。まだ夕食までは時間があったので、とりあえずドウオーモへ向かった。ナポリのドウオーモも立派で金がよく使われ大きな銅像が多く派手な教会だなどという印象だった。やはり、ローマ、ミラノに並ぶ三大都市だけあって立派である。ドウオーモでナポリに挨拶をし、海沿いを歩きながら中心街へ向かった。ナポリの海沿いはとても綺麗でサンタルチア港や Castel dell'Ovo(卵城)などがあり、特に夕焼けは最高に綺麗だった。

レストランを探すというだけでなんのあてもなくナポリの海沿いの道を歩き、ふと海を見た時、急に寂しくなった。『今、俺がここにいるひとり旅を始めたということは、もうあのトーディで働いていた日常はない。この旅が終われば日本へ帰国するんや』と、ふとそんなことを考えてしまった。イタリアの旅を進めるということは、イタリアから離れるということで、なんとも寂しくなった。それほどトーディでの生活が幸せで充実していたのだと、少し嬉しくもなった。そしてナポリの海を見ているうちに、『進もう』と決意した。

ふらりふらりとナポリの賑わっている方へ進む。この夜のレストランは、トーディを出る前に語学学校で出会ったナポリに詳しい人に教えてもらったレストランに行くことにしていた。

何せ初めての街でマップ頼りに歩くがなかなか見つからない。しかし、それも旅の醍醐味。迷いながらもその街の雰囲気や人を肌で感じるができる。ただすんなり目的地については面白くない。ここでこんなものが！？こんなところにこんな人が！？など小さな発見がたくさんある。

迷いながらも無事レストランに到着。雰囲気の良いレストランだった。まず、食べたかった『ムール貝と浅蜷のリングイーネ』を注文。南イタリアでは乾麺のリングイーネを魚介と合わすことが多い。そして必ず魚介のパスタには pomodorini(プチトマト)と prezzemolo(イタリアンパセリ)が欠かせない。この二つが魚介を最高に引き立てる。ここで食べたこのパスタも貝類から出る海の美味しいエキスにプチトマトの甘みとイタリアンパセリの香りが最高にマッチし、そこに白ワインを一口飲めば文句なしにうまかった。

それから secondo piatto を注文したが、またも

ハプニングが起きた。

パスタを食べ終わり、カメリエーレが肉か魚を食べるか？と聞いたので、せっかくだから何か魚料理をとメニューを見ると『rombo (ヒラメ)』と書いてあった。イタリアでヒラメを食べたことがなかったので、『Allora, vorrei un rombo』という、カメリエーレが頷き、活きの良い大きなヒラメを持ってきて『Ok, rombo è questo』と言ったので、『Sì, sì, lo so.』と答え、付け合わせはジャガイモで注文した。このやりとりがまずかったのである。数分後カメリエーレが持ってきたのは活きの良い大きなあのヒラメを一匹丸々調理しジャガイモをつけたものだった。私はてっきりちょうど良いサイズに切ってくれるのだと思っていた。

そう、あの時カメリエーレがヒラメはこれだよと聞いたのは、ヒラメを見せたのではなく、このサイズを調理するが良いのか？と聞きにきたのである。私はてっきり、外国人だから気を利かせて『rombo』とは何かを見せてくれたのだと勘違いしてしまったのだ。

周りのお客は私を不思議そうな目で見ている。アジア系の青年が一人で来て大きなヒラメを丸々一匹食べる姿は異様だったことだろう。

頼んでしまった手前、なんとか八割ほど食べたが後は食べきれず、カメリエーレがお皿を下げるときには笑われてしまった。

これも旅の良い思い出になった。後にも先にもあんなに大きなヒラメを一人で食べたのは、この時が最初で最後である。

さて、美味しい料理と少しのハプニングを堪能し、店を後にしてホテルへ向かった。

ナポリの夜はやはり少し怖かったが、中心街などは綺麗で賑やかで、海沿いはライトアップがされ、歩いているだけで良い気分になった。

そんなナポリの夜を歩き、バーで寝酒用のビールを買い、無事にホテルに到着した。

明日はナポリからポンペイへ向かう。ナポリからポンペイへは電車一本でいける。ポンペイはその昔、火山の噴火に飲み込まれ、たったの一晩で都市がなくなったという歴史があり、今はその遺跡を見ることができる。溶岩に飲み込まれたので都市がそのままの形で残っている。それが有名なポンペイ遺跡である。

そんなポンペイへ向け、美味しい魚料理と火山の土壌でできた『Tufo』と『Vesuvio』、この二つの白ワインを求めて出発。

さて、ポンペイではどのような食材、人、ハプニングに出会えるのか？少しの不安と大きな期待を胸にナポリのホテルで眠りについた。

～レストランご紹介～

京都下鴨 ダイニングぼてちん

今月のコレンテにご寄稿頂いた岡本さんがおつとめの、京都下鴨にある洋食店です。引き続き今月も特典ご提供頂きましたので、ぜひご利用下さい。

住所：京都市左京区下鴨西本町 21-1-101

アクセス：京都市バス・京都バス「府立大学前」

下車 目の前

Tel: 075-781-0028

HP: <https://www.botechin.com>

特典：ぼてちんのチラシが今月号のコレンテを提示していただくとアイスクリーム1つサービス
(特典期間：2019年9月末まで)

《会館からのお知らせ》

10月からの秋学期開講に先だち、無料体験レッスンを開催します。この機会にぜひ新たな世界への扉を開けてみましょう！

●イタリア語

京都本校：9月30日(月)11:00、10月5日(土)11:00

四条烏丸：10月4日(金)19:00

大阪梅田校：9月30日(月)15:00

●スペイン語

京都本校：10月1日(火)13:00

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館

〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4

TEL: (075) 761-4356 / FAX: (075) 761-4357

E-mail: centro@italiakaikan.jp

URL: <http://italiakaikan.jp/>